

のれん代、規則償却必要

早稲田大学教授

辻山 栄子氏に聞く



合併や買収などで発生するのれん代の会計処理方法が日米で異なり、議論されている。米国基準などではのれんを規則的に償却せず、価値が損な

会計
ピックアップ

われた時に減損処理するが、日本は二〇〇六年四月から、規則償却を残したまま減損処理も適用する方式を採用する。買収を頻繁に実施する新興企業は償却負担が業績の重しとなる。会計基準に詳しい早稲田大学の辻山栄子教授に聞いた。

——なぜのれんを規則的に償却するのか。

「企業を買収する場合、買収コストを上回るリターンを上げられるかどうかを判断する重要なポイントとなる。取得した資産や負債を時価評

買収コスト、正確に把握

価し、被買収企業の超過収益力(のれん代)にもどれだけコストを払ったのかを正確に把握しなければならぬ。のれん代も買収コストなので、利益を計算するには他の資産に配分されたコストと同様に規則的に償却する必要がある」

「のれんを償却しなければ買収費用がかからないことになる。買収コストを上回る余剰があつて初めて買収の意味があるのに、償却する必要がなければ買収金額にかかわらず企業業績が良くなってしまう。おかしな結果を招き、投資家を惑わすことになる」

——日本企業は償却負担があり米国企業に比べ不利との指摘もある。

「米国基準を十分踏まえた上で日本基準を作ったのだから、今から向こうに合わせるのはおかしい。米国は政治的圧力でのれんの非償却を決めたが、一方でのれんの価値を評価しにくい点に配慮し、のれんの計上額をできるだけ小さくするよう会計ルールを厳格にした。米国の方が特段有利というわけではない」

——企業ブランド力とも言えるのれんは減らないという意見がある。

「そんなことはない。企業はブランドを維持するために広告宣伝や商品開発に費用をかけている。のれんは少しずつ使われて減ると考えるのが自然だ。のれんを償却せずに計上し続けるのは、買収後に企業自身の努力で生み出した超過収益力を自らの評価でバランスシートに計上するようなものだ。自己評価で膨らんだバランスシートを投資家は信用しない」

——米国基準と日本基準のメリットとデメリットは。

「米国基準はのれんを規則的に償却しないので確かに企業業績の負担にはならない。ただ、減損処理だけに頼っているため、収益悪化が続くと突然巨額の減損損失が発生し、投資家を驚かしかねない。バランスシートに巨額ののれんが累積されていくのもデメリットだ。減損テストをより厳格に実施する必要があるため手間も煩雑となる。日本基準ではのれんの償却負担が企業業績を圧迫するが、米国基準のようなデメリットがない」

——新興企業からののれん代非償却を求める声が上がっている。

「危険だ。少しでも利益がでる企業を買えばどんどん利益が上乗せされて業績が好調に見えるうえ、償却をしなければ倒れる時はあつという間に倒れてしまう。投資家の目に買収効果ばかりが映り、費用が見えにくくなる」